

## 雪竇頌古百則の研究（二）

佐藤悦成編

はじめに

『雪竇頌古百則』の著者雪竇重頭（九八〇～一〇五二）は、遂寧（四川省）の人で、俗姓を李、字は隱之といった。儒者の家に生まれ、幼年よりその薰陶を受けたが、選官よりも選仏の道を選んで南遊し、雲門宗の智門光祚に謁してその法を嗣いだ。五年間、雲門宗の祖文偃に学んで、宗旨の玄奥を究めた。雪竇山に入り、資聖寺に住して大いに宗風を興隆に導き、雲門宗中興の祖といわれた。住山三〇余年、七〇余人の門弟を養成した。世寿七三。法臘五〇。諡号は「明覺大師」という。雪竇の語録に『雪竇明覺禪師語録』がある。その中で、『景德伝燈録』『趙州録』『雲門広録』等に収録された禅僧の行実、偈頌を付したのが『雪竇頌古』である。後に臨済宗の圓悟克勤が垂示・評唱・著語を付して公案集となした書が『碧巖録』で

ある。小論は、『宏智頌古百則』の考察に続くもので、曹洞禅と臨済禅で用いられた公案集を対比させ、その特質を考究することに目的がある。

研究会は、佐藤清道、伊藤秀真、大橋崇弘、杉原修一、富川拓哉の各氏が中心となり、関美奈子氏、西川慈恩氏の参加も得た。継続して百則まで考察を進めてゆく。

### 第一則 達磨廓然

【本則】

擧。梁武帝問達磨大師。如何是聖諦第一義。磨云。廓然無聖。帝云。對朕者誰。磨云。不識。帝不契。達磨遂渡江至魏。帝後擧問志公。志公云。階下還識此人否。帝云。不識。志公云。此是觀音大士。傳佛心印。帝悔。遂遣使去請。志公云。莫道階下

發使去取。闔國人去。他亦不回。

〔訓読〕 挙す。梁の武帝 達磨大師に問う。如何なるか是聖諦第一義。磨云く、廓然無聖。帝云く、朕に對する者は誰ぞ。磨云く、不識。帝契わず。達磨遂に江を渡り魏に至る。帝 後に挙して志公に問う。志公云く、陛下 還たこの人を識るや否や。帝云く、不識。志公云く、これはこれ観音大士 仏心印を伝う。帝悔いて、遂に使を遣わし 去きて請わんとす。志公云く、道うこと莫れ 陛下 使を発し去つて取らしめんと。闔國の人去くとも他亦回らず。

〔和訳〕 諸君、よく聞きなさい。梁の武帝が達磨大師に聞きました。「仏法の一番大事な教えとはどのようなものですか」と。達磨は「心にあらゆる分別を生じさせないことです」と言いました。武帝は「あらゆる分別がなくなるといふなら、今ここにいる私とあなたの存在をどのように説明するのですか」と聞きました。「衲にそのような分別はありません」と達磨は答えました。とうとう武帝は達磨の言っていることが理解できませんでした。達磨は長江を渡り魏の国に向かいました。達磨が去った後、武帝はこのことを志公に話しました。志公は「陛下はその人物を御存じですか」と聞きます。武帝は「知らない」と答えます。志公は「あのお方は観音菩薩であり、仏法

を伝える人です」と教えました。武帝は悔やみ、使者を送つて達磨に再び来てもらうように頼もうとしました。すると志公は「陛下それを言つてはなりません。たとえ使者を送つても、また国中の人が頼んでも、ここへ戻ることはないでしょう」と答えるのでした。

〔釈意〕 達磨と梁の武帝との問答である。『宏智頌古』の第二則にも「達磨廓然」の問答はあり、本則の内容は後半を除いてほぼ同じである。

梁の武帝は達磨に對して仏法が何たるかを聞き出そうとする。しかし達磨の答えは「廓然無聖」と「不識」であった。武帝から仏法の最も大事な教えとは何かと聞かれた達磨は、心の中のあらゆる分別をなくすことだと言うのである。心を空にして、尊卑・善悪などの分別を起ささないことこそ、仏法の最奥であり、悟りの境地に至れば、あらゆるものに対する執着や分別がなくなることを示した。達磨の一言で武帝は気付いてもいいのであるが、皇帝としての自己、仏法の外護者としての執着に留まつてしまった。達磨が去った後、武帝は志公を呼んでこのことを話した。ここから武帝と志公の問答となり、『宏智頌古』では省かれている。志公の質問に對して武帝は「不識」と答えている。この時点での武帝は、達磨の問答から学んで、執着や

分別が生じていないように見えるが、志公の「観音大士」とのことばに分別を起こしてしまう。武帝は達磨に再び合おうするが、志公は同じことを繰り返そうとする武帝を押しとどめるのである。

なお、この問答が『宏智頌古』には記載されないのは、当時、禅僧は公案の解釈によって自己の境地を示すようになっていたことから、雪竇は「達磨の不識」と「武帝の不識」を対比させ、学人の理解を進めようとしたのではないであろうか。大慧が『碧巖録』を危ぶんだのは、公案理解の方向性を示されることで、学人が教条的に捉え、疑似体験に満足して本来の悟道に至れないと考えたからであろう。

【頌】

頌云。聖諦廓然。何當辨的。對朕者誰。還云不識。因茲暗渡江。豈免生荆棘。闔國人追不再來。千古萬古空相憶。休相憶。清風匝地有何極。師顧視左右云。這裏還有祖祖師麼。自云有。喚來與老僧洗脚。

〔訓読〕頌に云く。聖諦廓然。何ぞ当的を弁すべき。朕に對する者は誰ぞ。還た云く不識と。これに因つて暗に江を渡る。豈に荆棘を生ずることを免れんや。闔國の人が追うも再来せず。千古萬古空しく相憶う。相憶うことを休めよ。清風匝地 何の極

まりか有らん。師 左右を顧視して云く、這裏に還つて祖師有りや。自ら云く。喚び来たりて老僧のために洗脚せしめんと。

〔和訳〕雪竇頌和尚が頌にいいました。全てを廓然無聖で言い表しているのです。これほどのを得た答えはありません。武帝が言った「私と達磨は一体何ですか」と聞かれれば、「知りません」と答えるほかありません。この一件によつて達磨は江を渡つて魏に去りましたが、国中の人々が追いかけたとしても、達磨は戻ることはありません。長年思い続けても戻つてはきません。達磨に對する思いは捨てなさい。清らかな風が大地を吹き渡り、止まるところがありません。師はあたりを見渡して言います。ここには祖師がいるでしょうか。自らいいいます。「祖師がいるなら、ここに喚んできて老僧の脚を洗わせましょう」と。

〔釈意〕最初にある「聖諦廓然」で全てを表している。本則でみせた武帝の問いは、達磨の言った「廓然無聖」で解決していると云つてよい。武帝が理解できないと考えた達磨は魏に渡る。国中の人々が達磨を追つたとしても、達磨は戻らないと言ひ、達磨に對する執着心を捨てるようにと、頌では「再来せず」と「相憶うこと休めよ」の句で言っている。頌は本則の流れに沿つて構成されている。結論は、最後の「祖師に脚を洗わせる」である。祖師には、自らの立場への執着も、脚を洗うことへの嫌悪

もない。分別を離れる事の例が親切に示されている。宏智正覺はこのような部分を蛇足と思ったのであろうし、大慧は学人が捕らわれることを危惧したのであろう。

【語彙】【達磨】菩提達磨（？～四九五・三四六～四九五・？～五二八・？～五三六）のこと。南宗禅の系譜では初祖にあたる人物。【梁の武帝】南北朝梁の皇帝。四六四～五四九、五〇二～五四九在位。幼い時から仏教を学び、歴代皇帝の中で最も仏教を重んじていたと言われている。仏心天子とも称された。【聖諦第一義】聖諦は聖なる真理を意味し、仏法の根本。釈尊の正覺をいう。【廓然無聖】廓然（くわくぜん）は心が広く、何ものにも執着しないさま。悟りの境地に至れば、凡や聖などの分別はなくなる。【志公】誌公とも。寶誌（四一八～五一四）のこと。幼い頃出家し、江蘇省の道林寺で禅定を修した。その後出奔し、各地を雲遊した。斉の武帝から時の人を惑わす者として投獄された。しかし、梁の武帝が即位すると、その禁を解かれたという。【荆棘】いばらの事。転じて煩惱や邪見などという。【千古萬古】はるか昔のこと。また長い時間を経ったのち。【清風匠地】清らかな風が大地を吹きめぐることを。転じて悟りの境涯をいう。

## 第二則 趙州至道

【本則】

舉 趙州示衆云。至道無難。唯嫌揀擇。纔有語言。是揀擇是明  
白。老僧不在明白裏。是汝還護惜也無。時有僧問、既不在明白裏。護惜箇什麼。州云。我亦不知。僧云。和尚既不知。爲什麼

却道不在明白裏。州云。問事即得。禮拜了退。

【訓読】挙す。趙州 衆に示して云く。至道無難、唯嫌揀擇。纔かに語言有らば、是れ揀擇 是れ明白。老僧は明白裏に在らず。是れ汝 還た護惜無しや。時に僧有りて問う。既に明白裏に在らずば。箇の什麼をか護惜せん。州云く、我もまた知らず。僧云く、和尚既に知らずば、什麼としてか却つていうや、明白裏に在らずと。州云く、事を問うこと即ち得たり。礼拝し了つて退ぞかん。

【和訳】諸君、よく聞きなさい、趙州從諗が大衆に説き示しました。

「最高の教えとは、決して難しいものではありません。好き嫌いの選り好みをしたり、憎愛の心を抱いたり、また、それらの想いを放ち去る事にも、こだわってはなりません。もしわずかでも言葉を発すれば、分別を離れたか（悟ったか）、離れていないかが一目瞭然になります。衲は悟りの境地からも離れていません。君たちはこの分別から離れるということを守っていただけますか」と。すると、一人の僧が質問しました。「悟りの境地を守っていくというのならわかりますが、その悟りにすら囚われないということは、一体何を守れというのでしょうか」と。趙州は答えます。「衲も知らないことです」と。僧は言います。「老師は知らないと言われますが、今現に悟りにも囚われないと言わ

れたました」と。趙州はいいます。「聞くことを聞いたら、もう下がつていいですよ」と。

【釈意】ここでは、趙州が分別を離れることが悟りであると弟子に説くのと同時に、悟りにすら留まらないことが仏法の真理に至ることであると説いている。もし、「分別を離れる」ということを理解しても、次には執着を離れるということに執着することになるのである。ここで質問する僧は、表面的には趙州の教えを理解しているものの、趙州の真意をさらに得ようとして悟りへの執着を露呈してしまった。趙州は、それが余計なことだと教えている。分別を離れるために分別を用いてはならないのである。

【頌】

至道無難。言端語端。一有多種、二無兩般。天際日上月下。檻前山深水寒。髑髏識盡喜何立。枯木龍吟銷未乾。難難。揀擇明白君自看

【訓読】至道難きこと無し。言端語端。一に多種有り。二に両般無し。天際に日上り月下る。檻前の山深く水寒し。髑髏識盡きて何ぞ喜び立たん。枯木龍吟銷して未だ乾かず。難々。揀擇か明白か。君自ら看みよ

【和訳】雪竇頌和尚が頌にいいました。教えとは決して難しいもの

ではありません。しかし、分別を離れようとすること自体が分別であり、言葉にすると難しいものです。仏法の真理を表す言葉は多くありますが、仏法の真理は二つとありません。日が東に上れば、月は西に沈みます。檻獄の窓から見れば山は奥深く水は冷たく見えることでしょう。髑髏には意識も尽きて喜びが起ることはありません。木枯らしが竜の鳴き声に聞こえるようでは平常心ではありません。分別を離れて道に至るのは難しいのですが、自分で気づくかねばならないものなのです。

【釈意】悟りを言葉で表すということは分別に陥りやすく、悟りを他にことばで伝えるということは難しい。天体の運行などのありのままの自然に、真理が現れていることを体得するのが本来の悟りである。本来、分別を離れることを説くことすら避けるべきであり、それは自ら気づくものなのである。

【語彙】【趙州從諗】(七七八〜八九七) 唐代。幼くして曹州の龍興寺で出家し、後に南泉普願の下で修行、南泉の「平常心是道」に関する言葉により、大悟してその法嗣となった。【至道無難唯嫌揀擇】鑑智僧璨『信心銘』の言葉。至道とは、あらゆるものの究極の真実で、分別を超え、言語を超えたもので、わずかでも言語で言えば真実は真実でなくなる。【揀擇】ものをえり嫌うこと。取捨愛憎の二見にわたること。【明白】浄明潔白のこと。心中に一点の曇りのない境界。取捨愛憎の二見にこだわらない。

## 第三則 馬師不安

【本則】

擧。馬大師不安。院主問。和尚近日。尊候如何。大師云。日月面佛。

【訓読】擧す。馬大師不安。院主問う、和尚 近日尊位如何。大師云く、日月佛。 日月佛。

【和訳】諸君、よく聞きなさい。馬祖道一が病床に在った時のことです。院主が「和尚様、体調はいかがですか」と尋ねました。

馬祖は、「日月仏、月面仏」と答えました。

【釈意】「宏智頌古」第三十六則と内容は全く同じである。病床に伏していた馬祖を、寺院を管理する役職の僧が見舞いにきた。体調を気遣う僧に対して、「日月仏」のごとく長寿であろうとも、「月面仏」の如く一日一夜の命であろうとも、仏道修行にある者として時間の長短に煩わされることはない、といっている。目前の事実こそが真実であるとすれば、病気を嫌悪分別する必要はなく、どのような状態であっても、それが仏の教えである。内容から、馬祖の病状は重く、自身で余命幾ばくもないことを知っていたと思われる。

【頌】

頌曰。日月佛。月面佛。五帝三皇是何物。二十年來曾苦辛。爲君幾下蒼龍窟。屈。堪述。明眼衲僧莫輕忽。

【訓読】頌に曰く。日月仏、月面仏、五帝三皇は何物ぞ。二十年來 曾て苦辛す。君が爲に幾か蒼龍窟に下る。屈。述べるに堪へたり。明眼の衲僧も輕忽すること莫れ。

【和訳】雪竇頌和尚が頌にいました。日月仏と月面仏。そして伝説の神々三皇五帝とは何者なのでしょうか。二十年にわたる辛苦を経て、あなたに会うために幾度も青龍の眠る岩屋にくだりました。それは大変な苦勞でした。また、言い換えて言います。禅僧はしっかりと眼を開けて、物事をないがしろにしてはいけません。

【釈意】命の長短は自身で図ることはできないと馬祖は言われたが。仏法の真理を得た理想の姿とはどのようなものであるうか。雪竇自身も二十年間もの間、師匠の下で辛辣な修行を積んできた。仏法の真理は、過去や未来を思うのではなく、ただ今現在を見据えて、疎かにしないものであると会得した。それこそ、禅僧の姿であると説いた。

【語彙】【馬大師】馬祖道一（七〇七〜七八八）南嶽懷讓の法嗣。【不安】身に病のあること。【院主】寺院の事務一切を主宰する管理者。監司、監寺。【日月佛月面佛】日月佛は一八〇〇歳の長寿を保つとされる。月面佛は一

日一夜の寿命を保つとされる佛の名。【日面月面】日面佛月面佛の相貌。一切衆生を救う慈悲の光を放つとされる。【五帝三皇是何物】中国上古代神代の皇帝「史記」。三皇は神、五帝は聖人としての性格を持つとされた。天皇・地皇・人皇という天地人三才と後には人類に文明をもたらした文化英雄が名を連ねる。【蒼龍窟】蒼龍の居座る窟の意。禪の幽玄なる宗旨の処。仏法の本分を象徴している。また、下蒼龍窟は、喪身失命を厭わない人でないといけないので、真に大事を明らかにするには幾多の師匠の下で辛辣なる鉄槌を受けなくてはならない意。【屈】かがむ。自らの立場を卑しめる。へりくだり、相手の立場に応ずる意。ここでは、苦勞の意。

【輕忽】きょうこつ。蔑ろ、軽はずみの意

#### 第四則 徳山挾復

【本則】

擧。徳山到瀉山。挾復子於法堂上。從東過西。從西過東。顧視云無無。便出。雪寶著語云。勘破了也。徳山至門首却云。也不得草草。便具威儀。再入相見。瀉山坐次。徳山提起坐具云。和尚。瀉山擬取扠子。徳山便喝。扠袖而出。雪寶著語云。勘破了也。徳山背却法堂。著草鞋便行。瀉山至晚間首座。適來新到在什麼處。首座云。當時背却法堂。著草鞋出去也。瀉山云。此子已後。向孤峯頂上。盤結草庵。呵佛罵祖去在。雪寶著語云。雪上加霜。【訓読】拵す。徳山 瀉山に到る。復子を挾んで法堂上に於て 東より西に過り 西より東に過り 顧視して無無と云て 便ち出

づ。雪寶著語して云く 勘破し了れり。徳山門首に至り却つて云く。也た草草なることを得ず。便ち威儀を具え、再び入つて相見す。瀉山坐する次いで、徳山坐具を提起して云く、和尚、と。瀉山扠子を取らんと擬す。徳山便ち喝して、袖を払つて出づ。雪寶著語して云く、勘破し了れり。徳山法堂を背却して、草鞋を著けて便ち行く。瀉山晚に至つて首座に問う。摘來の新到什麼処にか在るや、と。首座云く 当時法堂を背却し 草鞋を著けて出で去れり。瀉山晚に至つて首座に問う。適來の新到什麼処にか在る。首座云く、法堂を背却して草鞋を著けて出で去れり。瀉山云く、此の子已後、孤峰頂上に向かいて、草庵を盤結し、仏を呵り祖を罵り去ること任らん。雪寶著語して云く、雪上に霜を加う。

〔和訳〕諸君、よく聞きなさい。徳山宣鑑が瀉山靈祐のもとを訪ねました。そして荷物を包んだ袱紗を脇に挟み、法堂の中を東へ西へ、西へ東へと往復し、振り返って「無無」と言つて、すぐに出ていってしまいました。これについて雪寶重顯が解説してこう言いました。「徳山の意図を見抜いたぞ」と。徳山は寺の門前に着くと振り返つて言いました。「早とちりをしてはいけません」と。そこで、威儀を整えて再び山門に入り、瀉山と対面しました。瀉山は座り、そして徳山は坐具を持ち出して言いま

した。「和尚」と。瀧山は傍らの扠子を取ろうとしました。すると徳山は大声で「喝」と怒鳴り、大衣の袖を払って出ていってしまいました。これについても雪竇重頭はこう言いました。「徳山の意図を見抜いたぞ」と。徳山はこの時、法堂を振り返ることもせず、草鞋を履いて、立ち去りました。瀧山は夜になってから首座に尋ねました。「先程の新参の僧はどこにいったのかね」と。僧は答えました。「法堂を振り返ることもせず、即座に草鞋を履いて出ていってしまいました」と。瀧山は言いました。「この僧は以後、険しい山の頂上に草の庵を築き、仏を怒鳴り、祖師を罵るだろう」と。雪竇重頭はこう言いました。「雪の上に霜を乗せるようなものだ」と。

〔釈意〕様々な禅師のもとで修行を積んだ徳山宣鑑が瀧山靈祐を訪ね、法堂を動きまわり「無無」と言うのだが、これは、どこもかしこも全てが真実であることを会得し、分別のない境地に至っていることを瀧山に主張したのである。雪竇重頭は徳山の境地を見抜いたといっているが、それは、悟りの入り口に達した程度ということであろう。この後、戻った徳山は瀧山の前で坐具を敷き礼拝せんとした。作法通り瀧山が扠子を取ろうとすると、徳山は「喝」と怒鳴りつけて法堂を出ていってしまうが、これは、他人に認められて悟りが成立しているのではないから、

瀧山の作法は余計なことである、との意図である。瀧山はそんな徳山を「険しい山に草庵を築く」と評しており、徳山のうぬぼれがなくなれば、抜きん出た禅僧となるであろうと評価している。しかし、雪竇は徳山のこの行為を「雪の上に霜を加える」と評し、二度目の相見は不必要なことであつたと、徳山を批判している。

### 【頌】

頌云。一勘破。二勘破。雪上加霜曾嶮墮。飛騎將軍入虜庭。再得完全能機箇。急走過。不放過。孤峯頂上草裏坐。咄。

〔訓読〕頌に云く。一たび勘破し。二たび勘破す。雪上に霜を加えて嶮墮す。飛騎將軍虜庭に入る。再び完全を得るは能く幾箇ぞ。急に走過せんとするも、放過せず。孤峰頂上草裏に坐す。咄。雪の上に霜を乗せて墮ちるところでした。漢の李広が匈奴の領域に入るようなものです。再び帰ることができるのは何人ほどでしょうか。急いで走り去ろうとしても、見逃されることはありません。険しい山の頂上に尻を据えています。それは残念なことです。

〔釈意〕ここでは徳山のことについて述べている。徳山の境地は二度、瀧山に見破られており、これでは雪の上に霜を乗せるようなも



ので、意味のないことであるとしている。その様は李広に対する匈奴のようなもので、滄山に徳山は手も足も出ないというところを表している。そして、孤立した山の頂上に尻を据えているというのは、悟入した徳山の自惚れぶりを表し、それはとても残念なことであるが、自身でそれを識れば優れた禅僧となるであらうとしている。

【語彙】【徳山】徳山宣鑑(七八〇〜八六五)のこと。金剛經に通じ、周金剛と称されたが、婆子に導かれて禅に入った。【滄山】滄山靈祐(七七一〜八五三)のこと。滄仰宗の祖。【複子】禅宗で、僧が行脚の時に食器などを包むのに用いる布のこと。【雪寶】雪寶重頭(九八〇〜一〇五二)のこと。雲門宗中興の祖とされる。【勘破】見破ること。【首座】坐禅の際に上位の席に坐る僧。【法堂】禅寺において住職が修行僧に教えを説く時に使われる建物。【雪上加霜】「雪上霜を加う」のこと。物の多くある上にさらに似たものを加えるということで、意味のないことを表す。【飛騎將軍】漢の李広(不詳く前一一九)のこと。【虜庭】匈奴の領地のこと。

### 第五則 雪峯粟米

【本則】

學。雪峯示衆云。盡大地撮來。如粟米粒大。拋向面前。漆桶不  
會。打鼓普請看。

【訓読】挙す。雪峯衆に示して云く。尽大地撮し来らば粟米粒の大

如し。面前に抛向す。漆桶不。鼓を打って普請して看よ。

【和訳】諸君よく聴きなさい。雪峯義存が大衆に向かつて言われました。天地宇宙を納がつまんでみたら粟粒ほどの大きさでした。君たちの前に放り出したなら、漆の桶の中が真つ黒で見分けがつかないように見当もつかないでしょう。分らないならよく修行して見極めなさい。

【釈意】我々が日常生活している相対の世界は、是非、得失、長短、大小の二元的世界であり、そのような世界を超えた仏の世界を示した一則である。粟はもみのままの米粒で日本のあわではない。一番小さいものの形容であり、一粟米粒から始まったのが宇宙であり、物と物とは結ばれていて、いつもはなれようがないのである。大小比較を超えた真の実相は、実は我々の真の心にほかならないのである。

【頌】

頌云。牛頭没。馬頭回。曹溪鏡裏絶塵埃。打鼓看来君不見。百  
花春至爲誰開。

【訓読】頌に云く。牛頭没し。馬頭回る。曹溪鏡裏塵埃を絶す。鼓

を打ち看せしめ来れども君見えず。百花春到って誰が為に開く。  
【和訳】雪寶和尚が頌にいました。あつちに求めこつちに求め、  
振り回されています。雪峯が容赦なく問い詰めます。雪峯の境

地は六祖慧能の鏡のように一点の曇りもありません。だからといって外に仏を求めてもいけません。花々が春になると一斉に咲き誇るのには人に見られる為ではありません。咲くことが真実そのものです。

【釈意】とことん見極めた人は、朝に粥を食い、昼に飯を食べるようなもので、ありきたりの事が真実である。雪峰は急所にひとつきくらしさえすればよいことを知っていたから、自己以外に仏を求めぬな、と一句で言い切った。さらに、慧能の無一物の境地にさえ囚われるなど説き、春に百花が咲き乱れる光景を、本来の自由の境地を譬えるのである。

【語彙】【雪峯】雪峰義存（八二二〜九〇八）徳山宣鑑の法嗣。大器晩成の禅僧とされる。【曹溪】曹溪は六祖慧能（六三八〜七一三）を指し、『六祖壇経』の中の、「菩提もと樹に非ず、明鏡また台に非ず、本来無一物何れの処にか塵埃を惹かん」という偈をふまえる。【曹溪鏡裏】『六祖壇経』の中の本来無一物の偈をふまえる。

第六則 雲門好日

【本則】

擧。雲門垂語云。十五日已前不問汝。十五日已後道將一句來。自代云。日日是好日。

【訓読】擧す。雲門 垂語して云く。十五日已前は汝に問わず。十

五日已後はまさに一句を道い来たれ。自ら代わって云く。日日これ好日。

【和訳】諸君、よく聞きなさい。雲門文偃が教えを示しました。「十五日前については皆さんに何も問いません。十五日以降について何か言ってみなさい」と。雲門が代って言いました。「過ぎ去る毎日が良い日であるよう努めなさい」と。

【釈意】「十五日以前」はこれまでのこと、つまり過去のことである。雲門は過去のことよりも、これからどういった修行をしたらいかを聞くのである。おそらく、誰も答えることは出来なかったであろう。雲門は「好日」の句で自ら答えた。好日は良い日の意味であるが、ここでの好日は全てを含む一日のことであると云える。一日の良し悪しに関わらず、訪れる毎日を精進して修行するように雲門は言うのである。

【頌】

頌云。去却一。拈得七。上下四維無等匹。徐行踏斷流水聲。縦観寫出飛禽跡。草茸茸。煙霧霧。空生巖畔花狼籍。彈指堪悲舜若多。莫動著。動著三十棒。

【訓読】頌に云く。一を去却し七を拈得す。上下四維等に匹なし。徐に行ないて踏断す流水の声。ほしほしに観て写し出す飛禽の跡。草茸茸。煙霧霧。空生巖畔 花狼籍。彈指して悲しむ

に堪えたり舜若多。動著すること莫れ。動著すれば三十棒。

〔和訳〕雪寶頌和尚が頌にいいました。一を取り除き、七を会得します。四方八方比較することはいいです。おもむろに歩いてみると川のせせらぎが聞こえ、眺めていると鳥が飛び去るところを見ます。草は生い茂り、煙が立ち込めます。須菩提が坐禅をしていると、空から花が降ってきます。舜若多神は悲しんで指を鳴らします。心を動かさなさい。こだわりの心が生じれば棒で三十回叩きます。

〔釈意〕この世界は真実の世界である。万物は移ろい変わっていき、諸行無常であり諸法実相であることを「流水の声」と「飛禽の跡」の句で言っている。それは本則の雲門の「好日」を示している。また草や煙は煩惱の意味に用いられるが、ここではありのままの様子を意味している。草が生えることも、煙が立ち込めることも意識して姿かたちを変えている訳ではない。そのありのままの様子こそ、仏道に通ずることを言っているのである。

〔語彙〕【雲門】雲門文偃（八六四〜九四九）のこと。雲門宗の祖。黄檗希運の弟子である睦州道蹤に参じた後、雪峰義存に参じてその法を嗣いだ。

【垂語】師家学人に教示すること。【拈得】とらえ得ること。または会得すること。【上下四維】上下は天と地。四維は乾・坤・巽・艮の四隅のこと。宇宙間という意。【草茸茸煙幕幕】草が生い茂り、煙がたち込めた様子のこと。共に無心無作で、仏性現成のありようのこと。【空生巖畔花

狼籍】空生は須菩提のこと。須菩提が坐禅をしていると、帝釈天が空から花を降らした「須菩提宴坐」という故事による。【舜若多】舜若は空の意味であり、すべてのものに実体がないこと。虚空の実体をも空性といい、これを神格化して舜若多神という。

### 第七則 慧超問佛

【本則】  
 擧。僧問法眼。慧超咨和尚。如何是佛。法眼云。汝是慧超。

〔訓読〕擧す。僧 法眼に問う。慧超 和尚に咨す。如何なるかこれ仏。法眼云く。汝がこれ慧超。

〔和訳〕諸君、よく聞きなさい。ある僧が法眼文益に聞きました。「衲は慧超と言いますが、和尚にお尋ねします。仏とは何ですか」と。法眼は「あなたが慧超ですよ」と答えました。

〔釈意〕慧超のいう「仏」とは悟りの境地、ないしは真実の自己を指している。全ての人には、一人一人に仏性が具わっており、真実の姿であると言える。しかし、誰もがそのことに気づいていない訳ではない。本則の慧超もその一人と言える。法眼は自身自身が真実の姿であり、仏であることを慧超に伝えたのである。

【頌】  
 頌云。江國春風吹不起。鷓鴣啼在深花裏。三級浪高魚化龍。癡

人猶辱夜塘水。

〔訓読〕頌に云く。江国に春風吹き起たず。鷓鴣啼いて深く花裏に在り。三級浪高くして魚 龍と化す。痴人なお辱む夜塘水。

〔和訳〕雪竇頌和尚が頌にいいました。江国に春風は吹きません。鳥が鳴けば、たとえ花の下に隠れていようとわかりません。鯉が高い浪の中を登って竜門をくぐれば、鯉は龍に変化します。迷いがある人は魚が龍になった後も、夜に何もない川の水を汲むのです。

〔釈意〕本則での法眼の対応は実に簡単明瞭と言える。その様子は春風も吹かないほど落ち着いており、その教えはまるで、花の下でも鳥が鳴けばすぐわかるほど理解しやすいものである。このことを会得することが出来れば、魚が龍になるように、悟りへの境地に至ることが出来る。しかし、慧超のように答えを外に求めているままでは悟りの境地に至ることは出来ないのである。

〔語彙〕【法眼】法眼文益（八八五〜九五八）のこと。法眼宗の祖。羅漢桂琛に参じた。【慧超】帰宗策真（？〜九九九）のこと。法眼の法嗣。【鷓鴣】キジ科シャコ属の鳥の総称。キジより小さく、コジュケイに似る。【三級浪高魚化龍】修行者が師家のもとに参じて鉗錘を受けると、鯉が竜門を透過すると龍と化するように、おろかな人でも悟りの境地に至って禅門の竜象となる意。【夜塘水】後人の愚かな空しい言句上の探索にたとえる。

魚が竜門を登ると竜になってしまう。しかし、癡人は魚が竜になって行つてしまつた後の何もない塘水を夜に汲んで、魚を得ようとする愚行をいう。

#### 第八則 翠巖眉毛

【本則】

舉。翠巖示衆云。一夏以来。爲兄弟説話。看翠巖眉毛在麼失。保福云。作賊心虚。抑長慶云。生也。雲門云。關。

〔訓読〕挙す。翠巖夏末衆に示して云く、一夏以来、兄弟の為に説話す。看よ翠巖が眉毛在りや。保福云く、賊と作る人心虚なり。長慶云く、生也。雲門云く、関。

〔和訳〕諸君よく聞きなさい。翠巖が夏安居の終わりになって、大衆に説法していいました。この夏安居が始まって以来、諸君のために仏法の要諦を説いてきました。さあ、今、柄に眉毛はありますか、と。保福従展がいいました。盗賊となる人は心が空虚なものです。次いで、長慶慧稜がいいました。大丈夫です。生えています。最後に雲門文偃がいいました。関、と。

〔釈意〕翠巖令参、保福従展、長慶慧稜、雲門文偃ともに雪峰義存の法を嗣いだ。四人の中で一番若い翠巖が夏安居を指導した。その間、三人が助化したのであろう。自己の全身を露わにして、

修行僧に仏法の要諦を説話してきた翠巖は、修行期間を終わるに当たって、衲に眉毛があるかを問ったのである。嘘をつくとも眉毛が落ちるといふことを踏まえての説法であるが、翠巖は化導の可否を問い、評価を求めたのである。仏法を正しく示し得たかを問ったといえよであろう。保福は、賊となる人心虚なりと応じて、翠巖の真意を理解し、皆が仏法を会得したので、心配には及ばないことを述べている。長慶は、生ぜりと述べて、率直に大丈夫と答えた。最後に雲門は「関」と応じて、それは無用なことだといった。本則の要点は雲門のことばにある。誰もが真実の中にいるのであるから、敢えてそれを確認する必要はないし、余計なことであるといったのである。翠巖は、三者三様で、それぞれの家風が現れているが、雲門の返答が的確に要点をついていると思つたであろう。

【頌】

翠巖示徒。千古無對。關字相酬。失錢遭罪。潦倒保福。抑揚難得。嘖嘖翠巖。分明是賊。白圭無玷。誰辨真假。長慶相諳。眉毛生也。[訓読] 翠巖 徒に示せるは、千古に對無し。関字もて相酬ゆるは、錢を失い罪に遭う。潦倒たる保福は、抑揚得難し。嘖嘖たる翠巖は、分明に是れ賊。白圭玷無し、誰か真仮を弁せん。長慶相諳んじ、眉毛生ぜり、と。

〔和訳〕雪竇頌和尚が頌にいいました。翠巖は「眉毛ありや」と父母未生以前の本来の面目を大衆に示しました。このように正面から白刃のようなことばを突きつけられては、千年の昔から今に至るまで、これに對応できる者はいません。それほど翠巖の示衆は優れています。しかし、雲門に「関」と応じられて、さすがの翠巖も骨折り損のくたびれ儲けになってしまいました。老練な保福が「盗人め、ビクビクするな」と言つたのは、翠巖を褒めたのかけなしたのか分かりにくいことです。よく喋る翠巖は油断ならない男で、うっかりすると懐中のものを根こそぎ盗まれてしまうぞ、といっているのですが、その真意は、彼の説法は瑕のない白い清らかな玉器のようでその真仮を見分ける人は少ないだろう、と評価しています。長慶は「眉毛は生えているじゃないか」という言葉で、本来の面目がここにあると贊嘆したのです。

〔釈意〕この公案は碧巖録の中の難則と言われている。理解の要点は「眉毛」が真の自己を表わしていると知ることと、翠巖の三人の兄弟弟子保福、長慶、雲門のコメントをどのように解釈するかであろう。翠巖が「衲の眉毛はちゃんとあるか」と聞いたのは、化導のためとはいえ喋りすぎて眉毛（本来の面目）は落ちてなくなつたのではないか、という意味だと思われる。保福

が「この盗人めが、ビクビクするな」と言ったのは保福は翠巖の煩惱・妄想を奪い取る働きを見て、自信を持って励ましたと考えることができる。長慶の「眉毛は生えていないじゃないか」という言葉は、本来の面目いつもあるじゃないか、と言ったと考えられる。最後に雲門が言った「関」が問題である。「関」とは「悟りへの門は閉められた。ここが通れるか」と言う意味だと解釈すればこの公案の全体像は捉えられる。宗峰妙超も、関山慧玄もこの「関」の公案を解決・透過して法灯を継いだことと有名である。日本臨済禅における心・燈・関の法灯はこの公案と深く関係している。

【語彙】【翠巖】令参は雪峯義存の法嗣【保福】従展（つぐく九二八）。この公案に出る翠巖、保福、長慶、雲門、の四人は雪峯義存門下の兄弟弟子。四人はほぼ同年齢だったようだが翠巖が一番若かったと考えられている。【眉毛】仏法を誹謗すると眉毛が落ちると言われる。仏法は言説を超えたものであり、言説に頼れば仏法を誹謗することになる。ここで眉毛という言葉は悟りの本体としての父母未生以前の本来の面目（＝真の自己＝下層脳中心の脳）を表わしていると考えられる。【賊となる人】盗人は内心ビクビクしている。盗人は賊機を持った翠巖をさしている。【長慶】慧稜（八五四く九三二）。【生ぜり】眉毛は生え揃っている。【関】悟りへの関門という意味。

## 第九則 趙州四門

### 【本則】

擧。僧問趙州。如何是趙州。州云。東門西門南門北門。

【訓読】 擧す。僧 趙州に問う、如何なるかはれ趙州。州云く、東門西門南門北門、と。

【和訳】 諸君、よく聞きなさい。ある修行僧が趙州従諗の元に来て質問しました。趙州とはどのようなものですか、と。それを聞いて趙州は、趙州城には東西南北に門があります、と答えました。

【釈意】 趙州従諗は趙州城に住んでいた。そこで僧は、人と地名とをひっかけて質問した。世の人は自分の城を作り、中にこもって四苦八苦している。では自縄自縛を開放するにはどうすればよいのでしょうか、と。趙州和尚それに惑わされることなく、東西南北に門があるように、出入りは自由自在だと応じている。換言すれば、人は誰でも元々仏として真実の中にいる、と示したのである。

### 【頷】

句裏呈機劈面來。爍羅眼絶纖埃。東西南北門相對。無限輪鎚擊開。

【訓読】 句裏に機を呈して劈面に來る。爍迦羅眼纖埃を絶す。東西

南北門相対す。限り無き輪鎚撃ても開けず。

〔和訳〕雪竇頌和尚が頌にいいました。「いかなるかこれ趙州」という僧の質問には、場所と人（趙州禪師）の二つを含み、いずれをとるかを見て、趙州を困らせる意図があります。僧はそのような難問を真っ向から趙州に突きつけました。並の禅僧であればそれに引っかけたて戸惑うでしょうが、趙州の心の目は曇りのない悟りの眼です。趙州は心の眼で僧の意図を見破り「東門西門南門北門」と答え、僧が提示した難問に対応しました。趙州が言うように、悟りへの門は東西南北と何処にでもあり、いつも開かれています。何処からも入れますが、悟りの世界は奥深く、いくら槌を振り回してこじ開けようとしても「悟りの世界」への関門を打ち破るのは容易ではありません。

〔釈意〕趙州従諗は河北省西部の趙州観音院に住していた。この僧の質問は地名である趙州に関する質問なのか、禅匠としての趙州の禅に関する質問なのか明確ではない。どちらで答えても、もう一方で反論する姑息な質問といえる。その意図を見抜いている趙州は、「東門西門南門北門」と言い、君はどちらを取るかね、逆に提示したといえる。地名としての趙州に関する回答だとすると、趙州城には「東門、西門、南門、北門があるよ」と言ったのであり、禅僧としての趙州の禅に関してならば、「衲

の禅には東門、西門、南門、北門といろんな門が開いているから、どこからでも遠慮なく入って来なさい」となる。とするなら、趙州の示唆したのは、自分の見解に留まる限り悟道は遠いという点であろう。禅の本義から外れたこざかしい問いに、僧の分別を見抜いたのであろう。

〔語彙〕【趙州】従諗（七七八〜八九七）唐代の禅者。南泉普願（七四八〜八三四）の法嗣。趙州観音院に住んだので趙州和尚と呼ばれる。【句裏】言句の中に真機を呈示すること。【劈面】まっこうから。【爍羅眼】ブツダの八十種好の一つ。白と黒の蓮華・花卉のようにはつきりと邪正・是非を見分ける眼。【緘挨】塵一つなく清らかである。【鎚】槌を風車のように振り回しても、の意。

#### 第十則 睦州掠虚

〔本則〕

學。睦州問僧。近離甚處。僧便喝。州云。老僧被汝一喝。僧又喝。州云。三喝四喝後作麼生。僧無語。州便打云。這掠虚頭漢。

〔訓読〕拳す。睦州 僧に問う。近離甚んの処ぞ。僧便ち喝す。州云く。老僧汝に一喝せらる。僧又喝す。州云く。三喝四喝の後作麼生。僧無語。州便ち打つて云く。這の掠虚頭の漢、と。

〔和訳〕諸君、よく聞きなさい。睦州道蹤が僧に尋ねました。「ここに来る前はどこにいましたか」と。僧はすぐさま「喝」といい

ました。睦州は言いました。「衲があなたに大声で叱られた」と。僧侶はさらに怒鳴りました。睦州は言いました。「三回、四回も怒鳴った後、どうしますか」と。僧侶は何も言えませんでした。

睦州はすぐに打って言いました。「この上っ面だけの奴め」と。  
 【釈意】睦州道蹤が僧侶に「ここに来る前はどこにいたか」と尋ねているが、これは僧侶の修行の境地を試しているのである。僧侶はすぐさま喝と応じたことから、「どこにいたか」という分別に囚われてはいないようだが、その後も怒鳴ったことから、睦州が怒鳴った後のことについて尋ねると、僧侶は何も言えなかった。これは分別を離れることに執着していたからであり、悟りの上辺だけをなぞっていたに過ぎないということで、睦州はそれを叱ったのである。

### 【頌】

頌云。兩喝與三喝。作者知機變。若謂騎虎頭。二俱成瞎漢。誰瞎漢。拈來天下與人看。

【訓読】頌に云く。兩喝と三喝と。作者機変を知る。若し虎頭に騎ると謂わば。二り俱に瞎漢と成らん。誰か瞎漢。拈じ来りて天下の人と共に看ん。

【和訳】雪竇頌和尚が頌にいました。二回、三回と応じました。作家は臨機応変を知っています。もしも虎の頭に乗ると言うの

ならば、二人そろって真実を見抜けない者になるでしょう。誰が真実を見抜けない者なのでしょう。このことを世間の人に見てもらいましょう。

【釈意】ここでは僧侶のことについて述べている。「作者」とは練達した禅匠のことで、もしも練達した禅匠が二回、三回と叱りつけるなら、臨機応変に行うということである。僧侶は二度、睦州を怒鳴ったわけだが、これで虎の頭に乗ったように彼を押さえつけることができたと考えているのなら、それは間違っていることである。なお、この「二人」とは僧侶と雪竇重頭であり、「僧侶だけでなく、自分も間違えるところであった」ということである。

【語彙】【睦州】睦州道蹤（不詳）のこと。道明とも。黄檗希運の嗣で、雲門文偃（八六四〜九九九）を接化した。【近離甚處】ここに来る前はどこにいたか、という意味の俗語。古来から禅僧の修行の境地を験するため、しばしば用いられた。【無語】何も言わないこと。【掠虚頭漢】わかつたふりをしている禅者を罵倒する為に用いる。【瞎漢】真実を見抜く目を持たない者のこと。

### 第十一則 黄檗酒糟

### 【本則】

擧。黄檗示衆云。汝等諸人。盡是唾酒糟漢。恁麼行脚。何處有



今日。還知大唐國裏無禪師麼。時有僧出云。只如諸方匡徒領衆。又作麼生。壁云。不道無禪。只是無師。

〔訓誦〕拳す。黄檗 衆に示して云く。汝等諸人 尽く是れ噶酒糟の漢なり。恁麼に行脚せば、何処にか今日有らんや。還た大唐國裏に禪師無きことを知るや、と。時に僧有り出でて云く。只だ諸方の徒を匡し衆を領するが如きは、又作麼生。壁云く、禪無しとは道わず。只だ是れ師無し。

〔和訳〕諸君、よく聞きなさい。黄檗希運が修行僧に示して言いました。「あなた方は皆、酒糟を食べている者です。このように各地を遍歴してまわっているだけで、どこかに悟入の日が来るというのでしょうか。また、唐朝には徳の高い禅僧がいないことを知っていますか」と。その時、僧が進み出て言いました。「では、あちこちで弟子を指導し、大衆を率いている人は、どのようなのでしょうか」と。黄檗は言いました。「坐禅が無いとは言いません。ただ、正しい指導者がいないのです」と。

〔釈意〕黄檗希運が学人に対して説法を行なっている。ここで述べられている「酒糟を食べる者」というのは、酔っ払った者から転じて、物事の真義を理解できていない、仏法を中途半端に理解して自己満足に浸っている者という意味である。そして、唐王朝にはこのような者ばかりなのを、行脚すれば知ることにな

ると説いているのである。また、黄檗は僧の問いに対して、真の指導者がいないといっている。

〔頌〕  
壁云。凜凜孤風不自誇。端居寰海定龍蛇。大中天子曾輕觸。三度親遭弄爪牙。

〔訓誦〕頌に云く。凜凜たる孤風自ら誇らず。寰海に端居して龍蛇を定む。大中天子曾て輕觸す。三度親しく爪牙を弄するに遭ふ。

〔和訳〕雪竇頌和尚が頌にいいました。堂々とした立派な態度とは、自分を誇らないことです。仏の世界にいて龍や蛇を鎮めています。以前に宣宗皇帝は触れたことがあります。三回、直接爪と牙で弄ばれるという目に遭いました。

〔釈意〕ここでは黄檗について述べている。黄檗は対比できる存在すらない孤高の禅者で、堂々とした立派な態度を取り、自らを誇ることもないとした。仏の世界にいてというのは、天下に座を構える禅の指導者という意味で、龍と蛇は優れた者と凡庸な者の比喩である。宣宗皇帝はその黄檗に触れたということが述べているが、塩官の会中で黄檗に反論し、三回打たれたことが述べられている。

〔語彙〕〔黄檗〕黄檗希運(不詳)のこと。唐代の禅僧で黄檗宗の開祖。〔噶酒糟漢〕酒糟を食べる者という意味。転じて他人の言説ばかり追いかけて、

真義を理解しようとしないう者を軽蔑して言う言葉。【行脚】僧が修行のために諸国を歩きまわること。【孤風】比較するものの無い優れたさま。【大中天子】唐の宣宗皇帝のこと。

## 第十二則 洞山麻三

【本則】

擧。僧問洞山。如何是佛。山云。麻三斤。

【訓読】挙す。僧洞山に問う。如何なるか是れ仏。山云く、麻三斤。

【和訳】諸君よく聴きなさい。一人の僧が洞山守初に尋ねました。

仏とは何ですか。洞山が答えました。目方が三斤の麻糸です。

【釈意】雲門宗の家風は「雲門天子」と言われるように、寄りつき難いほど高貴な内容を持っている。中でも此の則は、簡素にして難解な一則である。仏が麻三斤である、と言ってそれで終わりなのではなく再び問いかけているのである。「麻三斤」は袈裟一肩分に相当する。麻三斤を重りとして天秤棒で量られているのは、その麻三斤と向き合っている私自身にほかならず、みずからの修行によって、自分を一肩の袈裟（仏）に仕立てるべきと示している。

【頌】

頌云。金烏急。玉兔速。善應何會有輕觸。展事投機見洞山。跛

鰲盲龜入空谷。花簇簇錦簇簇。南地竹兮北地木。因思長慶陸大夫。解道合笑不合哭。咦。

【訓読】頌に云く。金烏急ぎ、玉兔速やかなり。善応何ぞ會て輕觸有らん。展事投機に洞山を見ば。跛鰲盲龜空谷に入る。花簇簇錦簇簇。南地の竹、北地の木。因つて思う長慶と陸大夫。道うを解す笑う合し哭く合からずと。咦。

【和訳】雪竇頭和尚が頌にいました。太陽と月とが素早く入れ替わるように、洞山の答えにはどこにも引つ掛かりがありません。洞山が言葉を使って真実を示したとも思ったら誤りです。花は錦となって咲き乱れ、南には質の良い竹、北には良い木がいっぱいなのが分からないのですか。それにつけても、長慶と陸巨はよく言ったものです。笑うのだ、泣くじゃないと。

【釈意】雪竇は、太陽と月で時の流れを示し、寸暇を惜しんで修行すべきと示した。花、竹、木をもってどこもかしこも仏の世界であることを表した。この僧は何もわかっていないが僧も仏であるのである。と長慶大安と陸巨の会話を引用して示した。

【語彙】本則は『伝灯録』卷二十二「双泉師寛」章、『会元』卷十五及び『古尊宿語録』卷三十八「洞山守初」章に見える。【洞山】洞山守初。九一〇〜九九〇。雲門文偃の法嗣。湖北省襄州の洞山に住した。【金烏急。玉兔速】光陰矢の如し。洞山の麻三斤の応答の素早しさを日月の移り変わりの速

さに譬えた句。「金鳥」は、太陽の別名。太陽の中に三本足の鳥が住んでいるという伝説に依る。「玉兔」は、月の異名。【花簇簇】花が群生して咲き乱れるさま。【長慶】長慶大安。七九三〜八八三。南泉普願の法嗣。【陸大夫】陸亘。七六四〜八三四。南泉門下の居士で、御史大夫となる。【解道】言うことができるの意。現代語の「会」に相当し、可能の意を表す助動詞。【嘆】感嘆詞であり、宗教的意味を持つ。

### 第十三則 巴陵銀椀

【本則】

擧。僧問巴陵。如何是提婆宗。巴陵云。銀椀裏盛雪。

【訓読】 挙す。僧 巴陵に問う。如何なるか是れ提婆宗。巴陵云く、

銀椀裏に雪を盛る。

【和訳】 諸君、よく聞きなさい。一人の僧が巴陵顛鑑に尋ねました。

迦那提婆尊者の宗旨とはどのようなものでしょうか。巴陵は答えました。銀の椀に雪を盛るようなものです。分別でとらえてはいけません。

【釈意】 提婆宗とは三論宗のことである。提婆は龍樹によって仏に帰依し、空と中道を説いた。銀椀に雪を盛るとは、第一義諦の平等と、世俗諦の区別は一体であることを示している。真理の裏付けがあつて現実世界が存在し、現実の肯定は真理によってなされることを示す。

【頌】

頌云。老新開。端的別。解道銀椀裏盛雪。九十六箇心自知。不知却問天辺月。提婆宗。提婆宗。赤旛之下起清風。

【訓読】 頌に云く。老新開、端的別なり。道うことを解す 銀椀裏に雪を盛ると。九十六箇心に自知すべし。知らずんば却つて天辺の月に問え。提婆宗。提婆宗。赤幡の下 清風を起す。

【和訳】 雪寶頌和尚が頌にいいました。新開院の巴陵和尚は立派な方です。「銀椀に雪を盛る」とは、まことに見事な答えです。

仏教以外の教えを奉ずる九十六種の人たちも自ら悟るところがあるでしょう。悟れなければ天の月に尋ねなさい。提婆宗よ。提婆宗よ。インドでは宗論に勝った者が赤い旗をたてるといいますが、九十六種の仏教を信じない人を論破して仏法を挙揚しています。

【釈意】 仏道の人にとつても、仏法以外の教えを奉ずる人々にとつても、この世界に存在している事実が共通であり、すべてが移り変わることも真実である。仏法を信じない人達も真実を外に求めるべきではない。議論に勝つたといつて赤い旗を立てるが、仏法は論破した相手さえも救うのである。

【語彙】 この則は、『会要』巻二六、『会元』巻一五、『禪門拈頌集』巻二七など参照。【巴陵】 巴陵顛鑑。生没年不詳。五代・宗初の人。雲門文偃の

法嗣。岳州巴陵（湖南省岳陽）の新開寺に住す。雲門宗は言句による教示を得意とするが、中でも巴陵は「鑑多口」と言われるようにこの点で優れていた。【提婆宗】提婆は龍樹の法嗣・迦那提婆のこと。『百論』の著者。禅宗では西天第十五祖とする。【端的】そのものずばり、究極の意。【十六種外道】釈尊の時代、インドで行われていた仏教以外の諸宗教の総称。実際は概数を挙げたに過ぎないとされる。【仏教を信じない人】下道。【九十六箇応自知】「銀碗裏盛雪」という巴陵の言葉で、九十六種外道は釈尊の時代・インドで行われていた仏教以外の諸宗教の総称。実際は概数を挙げたに過ぎないとされる。

#### 第十四則 雲門対一説

【本則】

擧。僧問雲門。如何是一代時教。雲門云。對一説。

【訓読】 挙す。僧 雲門に問う。如何なるか是れ一代時教。雲門云く、對一説。

【和訳】 諸君、よく聞きなさい。ある僧が雲門文偃に尋ねました。「釈尊が一生の間に説かれた教えはどのようなものですか」と。雲門は「その時々に応じて説かれている」と答えました。

【釈意】 修行僧は釈尊が説いた教えの内容を尋ねたが、対する雲門は内容ではなくどのように教えを伝えたかという方法を答えました。「對一説」は対機説法のことであり、一人ひとりの力量や

状況に応じて導くことから、一樣には言い切れないことを表している。また、言葉は違えども教えの根底に流れる釈尊の思想、人々を苦悩から救いたいという思いは一貫しているということができる。

【頌】

對一説。太孤絶。無孔鐵鎚重下楔。閻浮樹下笑呵呵。昨夜驪龍拗角折。別別。韻陽老人得一概。

【訓読】 對一説 太だ孤絶。無孔の鉄鎚に楔を重下す。閻浮樹下に呵呵と笑う。昨夜 驪龍角を拗じ折らる。別なり別なり。韻陽老人 一概を得る。

【和訳】 雪竈頭和尚が頌にいました。對一説と答えた雲門和尚の悟境は、比類ないほど優れています。それは穴のない金槌に楔を打ち込むようです。閻浮提にある大樹の下で笑っています。昨夜には驪龍の角を折ってしまいました。その佇まいは別格です。雲門和尚は楔もっています。

【釈意】 対機説法は非常に優れた教化の手段である。そう答えた雲門は対機説法という釈尊の使った金槌を手にとって、仏法の真髄という楔を弟子に打ち込んでいるかのようにある。對一説とは一見すると多くの枝葉が広がる森だと思っていたものが、実は一本の閻浮樹であったかのようなものである。黒龍のような

煩惱をも軽くねじ伏せるその手腕は別格であり、雪竇は雲門を高く評価していることが伺える

【語彙】【雲門】雲門文偃(八六四〜九四九)。雪峰義存の法嗣であり、五家七宗のひとつ雲門宗の祖。伝灯録には彼の法嗣に六十一人あるとし、その宗風を広めた。【對一説】対機説法のように一人一人の状況や問題によって教えを変えたこと。【閻浮樹】閻浮提にある想像上の大木。広大な森のようであるが、実は一本の木であったという逸話から。【驪龍】黒い鱗の龍。顎の下に貴重な珠を持っているともされ、入手するのに大変危険が伴うことを指す。【韻陽老人】雲門のこと。韶州で南漢劉氏の帰依を受け、雲門山光泰禅院を開いたことに由来する。

### 第十五則 雲門倒一説

【本則】

擧。僧問雲門。不是目前機。亦非目前事時如何。門云。倒一説。【訓読】挙す。僧 雲門に問う。是れ目前の機に非ず。亦た目前の事に非ざる時如何。門云く。倒一説。

【和訳】諸君、よく聞きなさい。僧が雲門に尋ねました。「目の前に働きというものがなく、また、頭在している現象が無いとはどのようなことでしょうか」と。雲門は「教えをひっくり返している」と言いました。

【釈意】目前の機とは眼・耳・鼻・舌・身という五感でとらえられ

る世界における様々な働きといえる。一方、その働きが作用して顕現する事柄、諸法を指す言葉が目前の事である。僧は原因と結果で織りなす世界の果て、因果応報を超越した先に果たして何があるのかと尋ねているのである。これに対して雲門は「倒一説」と答え、僧の誤った理解を一語で正している。目の前に現れた「機」や「事」という現象を否定し尽くすことで仏法の真理が明らかになることはなく、因果・縁起そのものこそ釈尊の教えである。雲門は僧の問いを生み出したこうした認識が、ひっくり返り、転倒していると言ったのである。

【頌】

頌云。倒一説。分一節。同死同生爲君訣。八萬四千非鳳毛。三十三人入虎穴。別別。擾擾匆匆水裏月。

【訓読】頌に云く。倒一説。分一節。同死同生 君が為に訣す。八四千万も鳳毛に非ず。三十三人虎穴に入る。別なり別なり。擾擾匆匆 水裏の月。

【和訳】雪竇頌和尚が頌にいました。倒一説とはびたりと言い当っています。生死を君たちと共にする覚悟ができています。八万四千の仏弟子達に鳳凰の羽は生えていません。三十三人の祖師方は虎穴に入った人々です。誠に別格です。水面に映る月がゆらゆらと揺れています。

【釈意】雲門和尚を賞賛する言葉から始まっている。「分一節」とは一本の割られた竹の節がもう片方の節と一致するように、僧の問い対する答えを導き出した雲門の力量を讃える言葉である。このような手段は弟子に対して真剣に向き合っているからこそ大意即妙に表せたのであろう。多くの人々が釈尊の教えの下で研鑽を積んできたが、仏法の真髄に迫ることができたのは一握りである。摩訶迦葉から慧能までの三十三人の祖師たちは虎穴に入るような覚悟を持つて仏教の深奥に分け入り、結果、悟人を果たした。そうした祖師がたは言うまでもなく別格であるが、ここでの雲門もまた格別の対応をしたと讃えている。水面に映る月が揺れる様は種々の働きによつて事物が変化することを意味し、不変の実体がないことこそ実相であると説いている。

【語彙】【倒一説】倒はひっくり返す、逆さまの意。ここでは弟子が縁起の教えを取違えていることを叱咤する意味合いで使われる。【分一節】分かれたものがびたりと一致すること。【同死同生】同じ人生を生き、死を共にすること。【鳳毛】鳳凰の羽を指し、傑出した人物を指す。【三十三人】摩訶迦葉から二七人の祖師と達磨から慧能までの祖師、合わせて三十三人を指す。【擾擾忽忽】しきりに動く様子。

## 第十六則 鏡清草裏漢

【本則】

擧。僧問鏡清。學人啐。請師啄。清云。還得活也無。僧云。若不活遭人怪笑。清云。也是草裏漢。

【訓読】挙す。僧 鏡清に問う。学人啐す。請う師の啄するを。清云く。還つて活を得るや無しや。僧云く。若し活せずんば人怪笑せん。清云く。也た是れ草裏の漢。

【和訳】諸君、よく聞きなさい。ある僧が鏡清に尋ねました。「柄が殻の内側から突つきますので、外から叩いていただけですか」と。鏡清は「そうすれば生まれるのですか」と言いました。僧は「もし生まれなければ人々の笑い種になるでしょう」と言いました。鏡清は言いました。「あなたは草むらでうろついているだけです」と。

【釈意】啐は雛が卵から孵化する際に殻を内側から突く動作を表す。啄はそれを見計らい、外から殻を突くことである。禅宗では弟子が修行を重ね、心境も充実したことを師家が見抜いて手助けすることを意味する。活を得るとは悟つて本来の面目が現れることを意味し、僧は機が熟したとして自信をもつて師に對した。しかし、啐啄同時を師に持ち掛けるようでは、例え師が応えたとしても程度は知れている。鏡清は突いてやる事は良いが、殻を破るに相応しい人間たりえているのかと念を押した。鏡清の言葉は僧の自尊心を見抜いた発言であり、人としての姿はして

いるけれども、魂はまだ生まれ出る前の状態で草葉の陰で漂っている」と断じている。

【頌】

頌云。古佛有家風。對揚遭貶剥。子母不相知。是誰同啐啄。啄覺。猶在殼。重遭撲。天下衲僧徒名邈。

【訓読】頌に云く。古仏に家風有り。對揚して貶剥に遭う。子と母相知らず。是れ誰か同じく啐啄せん。啄し覺せど、猶お殼在り。重ねて撲に遭う。天下の衲僧 徒に名邈す。

【和訳】雪寶頌和尚が頌にいいました。祖師達の指導にはそれぞれ特色があります。対応を誤れば上つ面を剥ぎ取られます。子と母は知らずに殼を突くのであり、誰が同時に突いていると思うでしょうか。外から突かれても殼の中にいます。また叩かれませんでした。世間の修行僧は無闇に悟入を主張しています。

【釈意】禪門に入り自己を確立した僧達は表現や対応の差こそあれ、みな絶対の自覚を備えている。對揚とは師の説法に対して自らの境地を表明することを指す。また、貶剥とは相手を非難し、面皮を剥ぎ取ってしまうことであるが、執着に捕われた自分を打破することに解釈できる。師と弟子の振る舞いから自然に導かれるものが悟りであり、どちらからも求める物ではない。鏡清が突いて殼を破っても、弟子の禅機とは一致しなかったため

殼が残り。また突かれることになるのである。多くの僧が誤った自信によって殼から抜け出せずにいるのである。

【語彙】

【鏡清】鏡清道愆（八六八〜九三七）。雪峰義存の法嗣で雲門文偃の兄弟弟子にあたる。【怪笑】【草裏漢】うらぶれる、落ちぶれること。【對揚】宗旨を宣言すること。【貶剥】非難し、面皮を剥ぎ取ること。【名邈】名声を遠くまで響かせること。

第十七則 香林西來意

【本則】

舉。僧問香林。如何是祖師西來意。林云。坐久成勞。

【訓読】挙す。僧 香林に問う。如何なるか是れ祖師西來意。林云く。坐 久して勞と成る。

【和訳】諸君、よく聞きなさい。ある僧が香林澄遠に尋ねました。「達摩大師が印度からやって来た意図とは何ですか」と。香林が言いました。「長く坐っていたので疲れました」と。

【釈意】祖師西來意とは、達摩大師が求めた禅の真髓とは何か、仏とは大悟とは如何なる境地に立つことなのかといった仏教の本質的な意味を指す。したがって、祖師西來意とは仏教の真髓、仏性を問うことに等しい。僧に対する香林には氣負いというものが全く感じられない。そのような分別から離れるべきと諭す

のであるが、教義や理論に振り回されず、坐禅に邁進していたからこそ出て来た言葉といえるだろう。

## 【頌】

頌云。一箇兩箇千萬箇。脱却籠頭卸角駄。左轉右轉隨後來。紫胡要打劉鐵磨。

〔訓読〕頌に云く。一箇兩箇千萬箇。籠頭を脱却し角駄を卸す。左轉右轉 後に随い来る。紫胡は劉鐵磨を打たんことを要す。

〔和訳〕雪寶頭和尚が頌にいました。一個二個千万個。轡を外して積み荷を下ろします。右往左往しているとすぐ後ろまでついてきます。紫胡和尚が劉鐵磨を打ったのは必要なことだったのです。

〔釈意〕無数の事物は縁起によって成り立ち、それぞれが仏の現れである。それに気づいた者は、馬のハミのように自らを縛り、重荷のようにのしかかる煩惱から解放される。紫胡和尚のもとへ劉鐵磨が訪れた時、「あなたは劉鐵磨か」と尋ねられた。鉄磨は「いやいや」とはぐらかすと、紫胡は「左轉右轉」と言った。鉄磨が「和尚は転動している」と答えると、すかさず紫胡は鉄磨を平手打ちした。悟りの本質とは自身の内にある真実を悟り、表現することである。自己認識を曖昧にしている限り、釈尊の境涯へ到達することはない。紫胡の一打は鉄磨の迷いを浮き彫

りにするために必要だったのである。

〔語彙〕【香林】香林澄遠（九〇八〜九八七）は雲門文偃の法嗣。師の雲門から得た問答の記録を己の衣に書き留めていた紙衣侍者として後世に伝えられる。【角駄】振り分けの荷物。【紫胡】紫胡利踪（生没年不詳）。南泉普願の法嗣。【劉鐵磨】（生没年不詳）。滄山靈祐門下の尼僧。

## 第十八則 國師塔様

## 【本則】

舉。肅宗皇帝。問忠國師。百年後所須何物。國師云。與老僧作箇無縫塔。帝曰。請師塔様。國師良久云。會麼。帝云。不會。國師云。吾有付法弟子耽源。却諳此事。請詔問之。國師遷化後。帝詔耽源。問此意如何。源云。湘之南潭之北。雪寶著語云。獨掌不浪鳴。中有黃金。充一國。雪寶著語云。山形拄杖子。無影樹下合同船。雪寶著語云。海晏河清。瑠璃殿上無知識。雪寶著語云。拈了也。

〔訓読〕挙す。肅宗皇帝。忠國師に問う。百年の後須むる所何物ぞ。國師云く、老僧の与に箇の無縫塔を作れ。帝曰く、請う師塔様。國師良久して云く、会すや。帝云く、不會。國師云く、吾に付法の弟子耽源というもの有り。却つて此の事を諳んず。請う詔して之に問え。國師遷化の後。帝耽源に詔して此の意如何と問



う。源云く、湘の南潭の北。雪竇著語して云く、独掌浪りに鳴らず。中に黄金有り。一国に充つ。雪竇著語して云く、山形の拄杖子。無影樹下の合同船。雪竇著語して云く、海晏河清。瑠璃殿上に知識無し。雪竇著語して云く、拈了也。

〔和訳〕諸君、よく聞きなさい。肅宗皇帝(代宗皇帝の誤りか)が南陽慧忠国師に尋ねました。あなたが亡くなった後、百年先に求めるものがありますか。国師は衲に墓を作つて下さい、と。そこで帝は、それはどのような墓ですか。国師はしばらく黙つてから口を開いて、わかりましたかと言いました。帝が私には分かりませんと言ったので、国師は衲が死んだら、衲の法を嗣いだ弟子の耽源がおり、このことに詳しいので、招いて聞いてやつて下さい、と。国師が亡くなった後、帝は耽源を召し出して問いました。すると耽源が詩をもつて答えました。湘の南潭の北、と。雪竇が解釈して、片手ではおいそれと音を立てず容易に聞けるものではありません。そこでは黄金が国中に満ちています、といました。雪竇は再び解釈して、誰にも仏性があつた、この世界こそ仏の世界といました。次いで、海はおだやかで河は静かで天下泰平です。透きとおつた仏の世界に指導者はいません。さらに、雪竇はこれで終り、としました。

〔釈意〕死を目前にした南陽に、皇帝は、あえて死んで後の望みを

問うのである。それは数十年も生き、いま死のうとしてあなたは、何を求めてきた人物だったのか、つまり、本来のあなたは誰だったのか、を問うているのである。南陽は、自分の墓を作つてくれ、と言うのである。墓はどのようなものであるかとの問いに對して、この世界全部が無縫塔「仏法」であると示し、しばらく沈黙したのである。しかし皇帝は分らなかつたので、南陽は侍者である耽源(名は應真)に聞くように言つたのである。耽源はどこともかしも仏の世界であることを簡潔に説いたのである。

【頌】

頌云。無縫塔。見還難。澄潭不許蒼龍蟠。層落落。影團團。千古古與人看。

〔訓読〕頌に云く。無縫塔。見ること還つて難し。澄潭許さず蒼龍の蟠ることを。層落落。影團團。千古古人に与えて看せしむ。

〔和訳〕雪竇頌和尚が頌にいました。仏の世界を見てもなかなか見えないものです。水の澄んだ淵に龍は潜むことができません。無縫塔は果てしなく高く、その影はどこにも満ちていません。仏は古より誰にでもこの仏の世界を見せて来たのです。

〔釈意〕この世界がそのまま仏の世界と会得することは難しい。差別も分別もない平等の世界を、はるか昔より誰もが見て来たに

もかわらず、それを仏の世界と思っていないのである。

【語集】【肅宗皇帝】唐第七代の皇帝。在位（七五六〜七六二）玄宗の第三子。安史の乱に際して、クーデターを起こし玄宗を退位に追い込み、靈武で即位する。【忠国師】南陽慧忠。（？〜七七五）越州諸暨の人。六祖慧能の高弟で、神会とともに北方に禅を広げるのに功績があった。【百年後】死後のことを言う。【無縫塔】卵型で縫襖が無く、一塊の石で造つてある塔。【耽源】耽源応真。唐代の人。慧忠の侍者をつとめ、法を嗣ぐ。後、吉州（江西省）の耽源山に住す。【湘之南、潭之北】どこもかしこも、の意味。湘は湖南を北上する大河。潭は潭州、現在の長沙。この付近には雲夢と言う古代の伝説の大沼沢があったとされている。【山形拄杖子】頭が山の形をした拄杖。禅家で用いられる山から切り出したままの拄杖を指す。

### 第十九則 俱胝一指

【本則】

擧。俱胝和尚。凡有所問。只豎一指。

【訓読】挙す。俱胝和尚。凡そ所問有れば。只だ一指を豎つ。

【和訳】諸君よく聴きなさい。俱胝和尚は誰に何を問われても、ただ指一本を立てました。

【釈意】俱胝がまだ人知れず小庵に住んでいた日のこと、実際という名の尼僧が、庵に着くなり笠も取らず錫杖を持ったまま、坐禅している俱胝の周りを三周し、「貴方が一言で禅を示したら笠を取ります」と言いました。俱胝は何とも答えられないでい

ると、尼僧は庵から出て行こうとしたので、俱胝が「日も暮れようとしている。まあ泊まっていきなさい」と声を掛けると、尼僧は「何とか答えが出れば泊まります」との返答があった。それでも俱胝は何も答えられなかったので尼僧は出て行つてしまい、俱胝は「衲は男のなりをしてはいるが、男の気概がない」と嘆いた。そこで発奮して、この重大事を明らかにしようと、庵をたたみ各地の高僧から教えを受けようと旅支度をし修行の旅に出ようとした。その夜、山神が「ここを離れることはない。明日、生き菩薩が来て和尚のために説法してくれるであろう」と告げた。翌日、天竜和尚がやって来た。俱胝は前の出来事ありのままに話した。すると天竜は指を一本立てて見せたのである。それを見たとたん大悟したのである。俱胝が全身を傾注して取り組んでいたからこそ自我が破れたのである。以後、問いに対していつも一指で答えたのである。天竜和尚は指を一本たてた。二本立てれば分別である。一本は全てが一に集約する仏の世界である。これを「天竜一指頭の禅」と呼んでいる。釈迦の拈華微笑と同意である。

【頌】

頌云。對揚深愛老俱胝。宇宙空來更有誰。會向滄溟下浮木。夜澗相共接盲龜。

〔訓読〕頌に云く。対揚深く愛す老俱胝。宇宙空じ来るに更に誰か有る。會て滄溟に向かつて浮木を下す。夜濤相共に盲龜を接す。

〔和訳〕雪竇頭和尚が頌にいいました。俱胝和尚の人を導く方法はたいしたものですよ。この世界をどう見回しても彼より優れた人はいないのです。そんな彼でも昔は艱難辛苦をしてみました。かつてそんな俱胝も面目丸つぶれの時があったのです。救われたのは天竜和尚に「天竜一指頭の禪」を学んだからです。

〔釈意〕雪竇は、俱胝の対応は本当に素晴らしい、誰がこのような境地にいるであろうか、俱胝一人だけだと褒めたたえているのである。釈尊は生まれるとすぐ七歩あゆみ、一指は天を、一指は地を指して「天上天下、唯我独尊」（天にも地にも、ただわれ一人尊し）と宣言して、一指の尊さをしめたのである。

〔語注〕〔俱胝〕婺州金華の人。生没年不詳。天竜の法嗣。常に俱胝（仏母准胝陀羅尼）観音を誦していたので俱胝と称された。〔天竜〕大梅法常の法嗣。大梅は馬祖下である。

